

月刊

2019

8
月号

みんぱく

特集

驚異と怪異

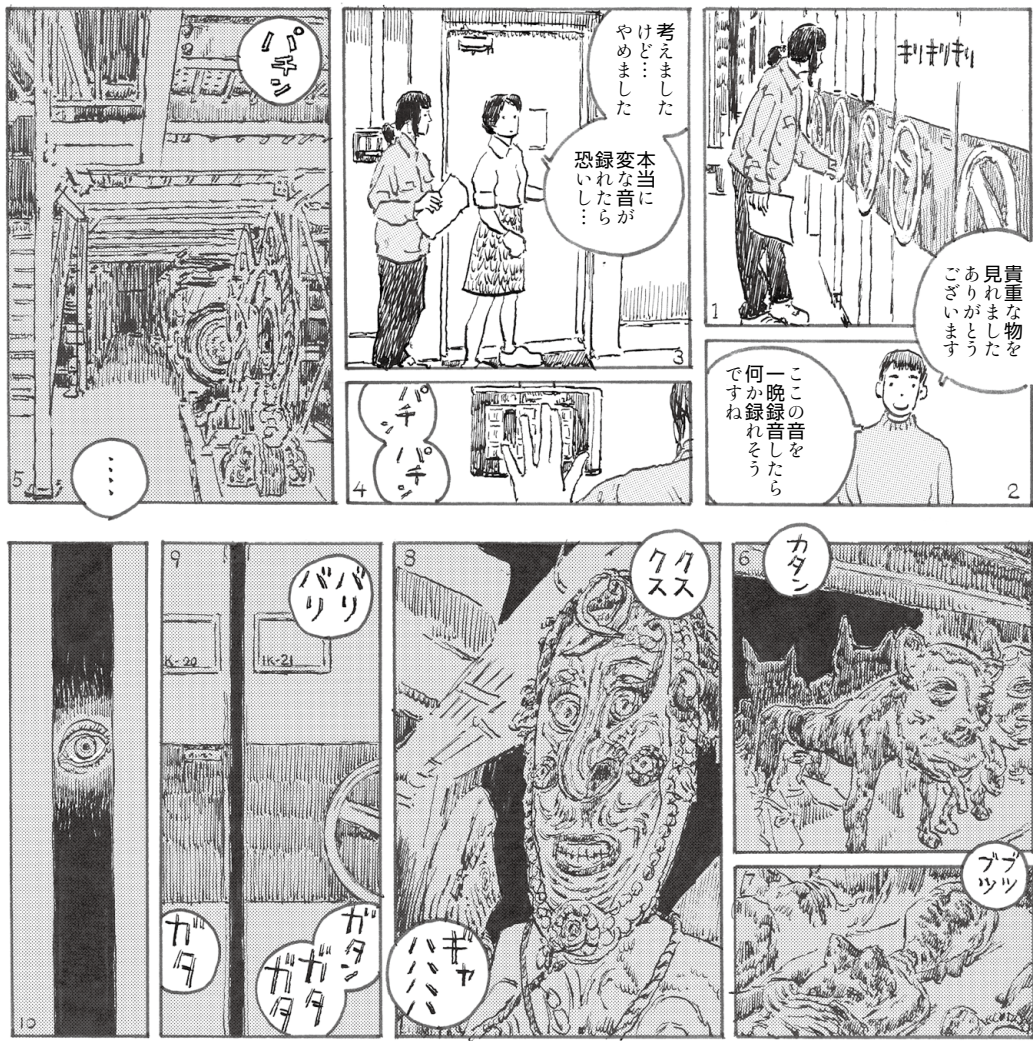
想像界の生きものたち



想像界の生態系 山中由里子
仮想世界に息づく怪物たち 長谷川朋広
能と怪異 辰巳満次郎
異音と妖怪 渡辺亮
鬼の棲む島 松尾瑞穂

国立民族学博物館の収蔵庫

いがらし だいち
五十嵐 大介



プロフィール
1969年埼玉県生まれ。漫画家、おもな作品は『魔女』（第8回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞）、『リトル・フォレスト』（日本と韓国で実写映画化）、『海獣の子供』（第38回日本漫画家協会賞優秀賞、第13回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞、2019年アニメーション映画公開）、『ディザインズ』、絵本『人魚のうたがきこえる』など。その他の漫画なども多数手がける。

月刊 みるぱく

8月号目次

1	エッセイ 千字文 国立民族学博物館の収蔵庫 五十嵐 大介	12	みるぱく Information
2	特集 驚異と怪異 —— 想像界の生きものたち 想像界の生態系 山中 由里子	14	想像界の生物相 キフェエの仮面 吉田 憲司
4	仮想世界に息づく怪物たち 長谷川 朋広	16	みるぱく回遊 風流と浮立 笹原 亮二
5	能と怪異 辰巳 満次郎	18	シネ倶楽部 M 社会主義体制と芸術と愛の物語 —— 「オーケストラ」 新免 光比呂
7	異音と妖怪 —— 異界とつながる音 渡辺 亮	20	ことばの迷い道 義理の親？ 奈良 雅史
8	鬼の棲む島 —— 「鬼ヶ島」の古今東西 松尾 瑞穂	21	次号予告・編集後記
10	〇〇してみました世界のフィールド ソグド人の城を掘る 村上 智見		

特集

驚異と怪異

想像界の生きものたち

人類は、この世のキワにいるかもしれない不思議な生きものをどのように思い描き、形にしているのか？ 世界の霊獣・幻獣・怪獣と現代のアーティスト・漫画家・ゲームクリエイターたちによるクリーチャーが大集合する特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の内容を紹介し、関連イベントの登壇者と実行委員が妖怪やモンスターの源泉にある想像と創造の力を語ります。

特別展

驚異と怪異

——想像界の生きものたち

会期 8月29日(木)—11月26日(火)

場所 特別展示館

想像界の生態系

山中由里子

民博 学術資源研究開発センター

… you cannot imagine the unimaginable

「想像もつかないものは、想像できないってことがやがてわかったんだ」一九六八年に公開されたSF映画の名作「2001年宇宙の旅」で、地球外生命体を描こうと苦心したことについてスタンリー・キューブリック監督はこう語ったという。彼は想像を絶するエイリアンのデザインを試み、さまざまな映像実験をするが、どうやってもどこかで見たようなヒト型、虫型、爬虫類型、クラゲ型などになってしまふ。結局、各辺の比が一对四対九の無機質な物体「モノリス」を登場させ、宇宙のどこかに知的存在を暗示させた。

試行錯誤のすえに、エイリアンそのものの表象をいさぎよくあきらめるところがキューブリックの天才たるゆえんであるが、このエピソードが

示すのは、天才の想像力をもつても、地球上の自然が創り出した型を超えた形は作れなかったということである。

それでも、見たことのないものに対する好奇心は尽きることなく、人間はこの世のキワにいるかもしれない存在の姿を、手に入る部品を必死



会場の縮尺模型。ラビリンスのような展示空間設計は、建築家若林広幸氏による(写真はすべて2019年撮影)

に組み合わせながら想像してきた。

ようこそ、驚異と怪異の迷宮へ

今回の特別展では、世界中の人びとの想像界に息づく生きものたちを展示する。「水」「天」「地」のセクションにわけられた第一部「想像界の生物相」(特別展示館一階)は、人魚、竜、鳥人、天馬、巨人、人間植物など、地球上の動物界、植物界、鉱物界に見出された素材をブリコラージュ(寄せ集め)した、パターンがありながらも多様な合成生物が並ぶ、まさに怪物百科展だ。第一部最後の「驚異の部屋(奥へ)」のセクションには、江戸時代後期に長崎の出島からオランダの王立の珍品陳列室に渡った人魚、ろくろ首、鬼などの幻獣ミイラが里帰りし、鎮座している。

第二部「想像界の変相」(特別展示館二階)では、「聞く」、「見る」、「知る」、「創る」のセクションの順に、未知なる世界の驚異や常ならざる怪

異が、どのように認識され、知識体系に整理され、創作のインスピレーションとなっているのかを探る。驚異と怪異の文化史を辿るとともに、想像界の幻獣が仮想世界の現実となり、人と機械が一体化し、遺伝子操作で合成生物が実際に生まれゆく、これからの時代の人類の想像力の行方について考える。本号の巻頭エッセイ漫画を描いた五十嵐大介氏が、この特別展のために書き下ろしたオリジナル作品「異類の行進」も初公開。

漫画家・ゲームクリエイター・水族館館長が登壇するクリーチャー座談会、能楽師と当館館長の怪異対談、パークシヨニストの異音ワークショップなど、関連イベントも目白押しである。

鬼太郎とハリウッド・ポッターとアラジンが出会ったら……、そんな世界観を妄想しながら、数年がかりで企画してきた特別展がいよいよ開幕する。ぜひご観覧のうえ、巻頭の五十嵐氏の漫画のように、夜ごとに展示場の物の怪たちが宴を開く様子を思い描くのも、また楽しいかもしれない。



ポスター撮影の現場。Cabinet of curiosities(珍品陳列棚)風に仕上げたポスターイメージには、じつは実行委員長顔が隠れている……



図録撮影の現場。図録・ポスター等の写真撮影は大道雪代氏、デザインは佐藤大介氏(中国の影絵人形。一番下写真の左から、H0093254、H0093253、H0093252、H0093255)

空想の怪物と現実の生きもの

わたしは仕事で二〇年以上、ゲームのための怪物をデザインしてきた。ゲームのなかには空想の生きものや怪物がたくさん登場し、主人公と戦ったり、一緒に旅をしたりする。ゲームは自然界には実在しないものたちと実際にコミュニケーションをとり、怪物に「触れる」ことを可能にする媒体である。

コンピューター・ゲームは、テクノロジーの進歩と非常に密接に関係している。わたしの働き始めた一九九六年ごろと今とでは表現に大きな変化が起こった。表現には大きく二つの側面がある。ひとつは見た目のグラフィック表現。もうひとつはゲームのシステムで、怪物の行動・振る舞いの表現である。

CG（コンピューター・グラフィック）は加速的に進化して、実写映像と見わけのつかないリアルな表現も可能になった。高解像度の鮮明なモニターが次々に登場し、現実には存在しない怪物も実在の生物と同じレベルの質感やディテールの表現が求められるようになった。そのため、怪物のデザインも現実の生物から学ぶ必要がでてきた。骨格や筋肉構

造など動くためのしくみから、鱗や皮膚、目などの質感もリアリティを感じさせるにはとても重要な要素だ。

ゲームにおける怪物は敵としての役割で登場することが多い。そしてバトルを盛りあげ、退治されてゆく。最近のゲームでは、単なる敵ではなく、世界観や生命を表現する重要な役目も担っている。

AI（人工知能）を使う事により、怪物が自律的に行動できるようになった。例えば、お腹が空いているときに餌を探して歩きまわる。環境を認識しながら本物の動物のように徘徊するのである。そして餌を見つけると狩りを始める。餌を見つけないにも、視覚や音の情報で探したりする。不利だと思えば逃げ出したり、仲間と連携したり、ゲームのなかの怪物は自ら状況判断して行動する。

ゲームが現実世界に

今後、ゲームの世界はここからさら

に大きく進化していくであろう。テレビやスマートフォンという画面から解放される日も近づいている。スマートグラスやスマートコンタクトレンズを使用することで、あたかも目の前に実在するかのように「つくられた世界」を見ることが可能になる。AIはさらに進化して、世界は果てしなく広がってゆく。

ゲームは一時的な疑似体験から、もうひとつの現実になり、バーチャルの世界に行くという体験に変わる。旅行をするという感覚で、別世界を訪れる体験ができるようになる。

ゲーム作りはそんな別世界を創造する仕事になると考えている。そしてモンスターのデザインは、新しい生命を生み出す仕事にどんなに近づいている。そのため、実際の生きものの生きた姿を見ることが、博物館などで骨

格や標本を見ることがデザインするうえでますます重要になっていくだろう。

しかし実在の生きものはとても美しく、そして精密に機能する。その究極の機能美、完成度に迫るデザインはなかなか難しいものだ。テクノロジーが進化するたびに、ワクワクしながらもいつも自然の偉大さと闘ってデザインをしている。



東京丸の内インターメディアテクに展示されているウマの骨格標本。ウマの骨格よりペガサスのイメージを膨らませる（空間・展示デザイン ©UMUT works、所蔵：東京大学総合研究博物館）



骨格と筋肉の構造を描いた図。ペガサスの特徴である翼をどういった構造にするのか検討しながら描いた



現在制作中のペガサスのデザイン画。デザインを考えて皮膚や、毛、翼を描いたもの

ペガサスのデザイン工程

能と怪異

辰巳満次郎

能楽師

目に見えぬもの

言うまでもなく、伝統的な日本文化の根源的精神は「目に見えぬものを見て、聞こえぬものを聞く」ところにある。ほんの僅かな現象からさまざまな情報を感じとる、人類がもとよりもつ能力に加えて、日本の気候風土が育んだ季節感であるとか、ライフスタイルとあったものが影響していると思われる。また、島国であるが故か文明の進歩が江戸末期までは緩やかで、文化先行型の国家であったことは、精神性を形成するに大変大きな意味をな

したと考える。

草木国土悉皆成仏というが如く、この世のすべてに神仏が宿るといふ観念は、まさしく日本にびつたりと思想観念であろう。神仏というと宗教的に聞こえるかもしれないが、森羅万象、あるいは時空を超越したものも含めてのことである。松嶺が松枝をサワサワと音立てさせるのを「カミ」と感じ、影向の松に向かいて神事芸能を奉納してきた。目的は天下泰平・国土安穩である。

はなくて、前方対象、つまり客席（能楽では「見所」という）の後方にあるべき影向の松が映り込んだことを意味する「鏡板」であるが、神仏がおわす空間であること、森羅万象に加え時空を超えた空間であることを表現している。他に



「怪土」(作者：児玉長右衛門能満、1720年ごろ、辰巳家蔵、亀田邦平撮影)

オニの存在

目に見えぬものの中には神仏のみならず、化生のものもいる。室町時代くらいまでは、日暮れ時は魔物の出る時間帯として、外出はなるべく控えたという。いわゆる「オオマガトキ」である。これは平安時代になって「逢魔時」と当てられたようであるが、本来は「大禍時」であって、禍の潜む時間帯という意である。「逢魔」も禍の一部ではあろうが……。ここで「オニ」の深く広い意味が出てくることになる。

「オニ」は「オヌ（隠）」隠れて目に見えぬ者、一瞬のうちに隠れる、消えてしまうものという意味をもつ音が転じたというが、単に現代の「鬼」の標準的な意味だけではなく、人の心に棲む哀しきものはたまた森羅万象の怪異な現象までも含むもので、悪であり悪でない？得体のしれぬものというのが本来の考え方であるようだ。基本的に能においては、男鬼は「顰」という獠猛な人間離れた赤黒い面を使い、女鬼は「般若」という角を生やしてはいるのだけれども、顔色は人間の肌色である面を用いる。顛末もハツキリして、顰は首打ちはね



「顰」(作者不詳、鎌倉後期、辰巳家蔵、佐藤晶子撮影)

られて退治され、般若は祈り鎮められる。どうしてこうも扱いが違うのだろうか。それはつまり、顰の男鬼は生まれながらの鬼であり、般若の女鬼は己の心に棲む恨み哀しみが高じて化した鬼であるところによる。魂を鎮められて鎮魂成仏するもの、邪念をもつまま消え去るものあり。ツノは化したものを表現しているのだ。さらには、正義の味方に退治される男鬼の実態は、制圧を企む権力者から敵視されるネイティブ(先住部族)であつたりする。国家統一の裡には悲劇も多い。故に能の世界では鬼は悪であり悪でないのだ。



能の演目「葵上」。六条御息所の生霊が横川小聖に襲いかかる場面(2013年、佐藤晶子撮影)

いつてよと思う。狐「小飛出」、蛇「真蛇」、鶴「猿飛出」などの能面がある。

今回のテーマ「怪異」の存在というならば、天狗「大ベシミ」、鬼神「小ベシミ」、狸「狸々」、獅子「獅子口」などもある。いずれも悪ではなく、祝言性の高いものが殆どである。魔性に誘引する天狗もあるが、牛若を扶ける鞍馬天狗もいる。野を守る春日野の鬼神海に棲み、孝行息子に汲めども尽きぬ酒瓶をプレゼントする妖精の狸々。石橋に戯れるのは普賢菩薩に仕える獅子。怪しさ恐ろしさというよりは、これらは超人としての能力で人間を守る、大らかな存在である。

すべての能において、キャラクターはそれぞれにふさわしい音楽で登場するが、前半に述べたオニ類など怪異な存在があらわれる前兆には、俄に黒雲立ち込め、辺りが暗くなり、風雨凄まじい状況になる。対して後半の超人グループは、空から妙なる音楽が聞こえ優雅にシテ(主演)があらわれるのである。

鬼、妖怪、怨霊、霊獣、鬼神、妖精……。およそ人とはかけ離れた存在とされる怪異なキャラクターたちは、善悪にかかわらず、能のなかでは奥深い心の表現として括られている。人の心に棲もうとも、異界に棲もうとも彼らの存在意義を知ることが、能のテーマでもある。能舞台という時空・次元を超越した世界にあればこそその表現を楽しんでいたただき

異音と妖怪——異界とつながる音

渡辺亮 パーカッションユニット

異音から想像するもの

昭和・平成の時代に多くの妖怪の肖像画を残された、故・水木しげる先生は、数々の妖怪談義のなかで、「妖怪をキャッチするには、八割くらいは音ですよ」と語っていた。それは、常日頃、姿が見えないのが妖怪やお化けの定

説であり、当たり前前に視界にあるものではないところから、感じることでできる部分の重要なポイントは音にある、という意味にもとれる。

実際に、各地で音に関する不思議な話を聞いてみると、山のなかの話では、大きな木が倒れる音がした、小豆を洗うような音がした、海辺の話のなかには、海が鳴る、風の唸るような音など、誰もが想像しうる自然音にまつわる話が多く登場した。民家のある村や町の近くでは、線路がないにもかかわらず汽車が走る音を聞いたという話が多くある。家のなかでは「家鳴り」の仕業とされる怪音現象や、「座敷童」の足音などを聞いた伝承話などが残っている。忘れられない話は、知り合いが幼年期に、机の上の金属(おそらくブリキ製の箱のなかからお囃子の太鼓のような音が聴こえたけれど、怖くて開けられなかったというもの。正体はわからずとも、感受性の強い子どもがキャッチした異音である。

このように、異音・怪音は、本来ならそこにあるはずがない風景を思い起こさせるといふ点で、人間の記憶や想像力を操る効力をもっているといえるだろう。

異界との交信

異界とかかわる音の道具として真っ先に思いつくのは梓弓である。能の「葵上」をご存知だろうか。生霊に祟られ寝込んでいる葵上を表現した一枚の小袖の傍らにて、梓弓の弦を叩きながら、霊を口寄せる照日ノ巫女。すると六条御息所の生霊があらわれ、自分の哀しい気持ちを述べる。やがてはその気持ちが高まり、破れ車に葵上を乗せて連れ去ろうとする。修験者である横川小聖の祈禱によって六条御息所は鬼と変化するが、法力により浄化されるといふ物語である。この場合は、弓の弦を叩く

ことによつて、死者の霊(または生霊)を口寄せる、つまり霊を招き入れて異界との交信をおこなうということである。



梓弓(H0219274)



筆者がかかわる特別展開ワークショップ「ゴミから生まれる異音獣!」の打ち合わせ風景(2019年)

特別展関連イベント

【公開座談会】

自然界から想像／創造する ～ Creature Creators' Symposium

2019年9月23日(月・祝) 13:30～16:30

場所：ナレッジシアター(グランフロント大阪北館4階)

【無料／要事前申込】

五十嵐大介(漫画家)
長谷川朋広(ゲームクリエイター)
西田清徳(海遊館館長)
山中由里子(本館教授)

【研究公演】

能と怪異(あやかし)

2019年9月29日(日) 12:30～15:30

場所：本館1階エントランスホール【無料／事前申込不要】

司会：山中由里子

解説：吉田憲司(本館館長)

出演：辰巳満次郎(能楽師)

【友の会講演会】

対談 幻獣！——そこに“在る”不思議な生きもの

2019年10月12日(土) 13:30～14:40

(見学会 14:50～15:30)

湯本豪一(妖怪・幻獣研究者)、山中由里子

【みんぱくセミナー】

珍獣・霊獣・幻獣・怪獣

——人はなぜモンスターを想像するのか？

2019年10月19日(土) 13:30～15:00

場所：本館セミナー室【無料／事前申込不要】

講師：山中由里子

【KAKENHI ひらめき☆ときめきサイエンスワークショップ】

ゴミから生まれる異音獣！

2019年11月2日(土) 13:30～16:30 不思議なケモノはどんな音？

2019年11月3日(日・祝) 13:30～16:10 不思議な音は何に見える？

場所：特別展示館地下休憩所【要事前申込】

講師：渡辺亮(バーカッションニスト)、山中由里子

【みんぱく映画会・みんぱくワールドシネマ】

ワンダーストラック

2019年11月9日(土) 13:30～16:00

場所：本館セミナー室【事前申込不要／要展示観覧券】

司会：山中由里子

【人文機構シンポジウム】

この世のキワ——自然と超自然のはざま

2019年11月23日(土・祝) 13:00～16:30

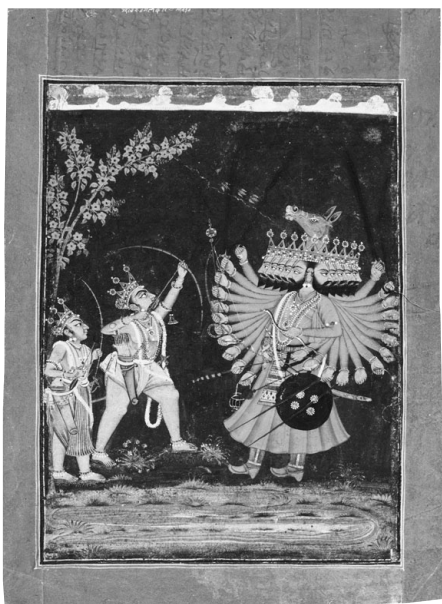
【みんぱくウィークエンド・サロン——研究者と話そう】

2019年9月1日(日) 14:30～15:15 山中由里子

2019年10月6日(日) 14:30～15:00 笹原亮二(本館教授)

2019年10月20日(日) 14:30～15:00 松尾瑞穂(本館准教授)

2019年11月10日(日) 14:30～15:00 齋藤晃(本館教授)



ラーヴァナと戦う王子ラーマ (CC0 1.0 Universal)

『ラーマヤナ』に登場する、南アジア版の鬼といえるラーヴァナの王国であるランカー島だ。ラーヴァナは一〇の頭と二〇の腕をもち、神々さえもかなわない類いまれな力をもつ羅

刹(鬼神)の王である。紀元前三世紀前後に成立したとされる『ラーマヤナ』は、コーサラ国の王子ラーマを主人公とする長編叙事詩である。ラーヴァナは王子の妃シターを奪い去り、ランカー島に幽閉する。

王子は猿のハヌマーンらの助けを借りて、ラーヴァナと激しい戦いを繰り広げ、最後にはラーヴァナにとどめを刺して妃を取り戻す、というのが物語のハイライトだ。ラーヴァナが治める羅刹の本拠地とされるランカー島は、一般的には今のスリランカだと考えられている。ラーヴァナは数万もの羅刹を率い、黄金あふれる王国を治める権力者であり、日本の鬼とは比較にならないほどのスケールだ。

だが、これを地方権力が中央との戦いのすえ平定される物語として読むならば、周縁化された他者が「鬼」として描かれるという共通点が見いだされる。

『ラーマヤナ』発祥の地であるインドからすると、ランカー島は鬼の棲む島だが、スリランカの人はどう思っているのだろうか。わたしは少なくとも、スリランカで特定の土地をラーヴァナの王都とするような伝説は聞いたことがなく、また、それで観光化が図られているということも寡聞にして知らない。由緒正しき仏教伝来の地を自負するスリランカにとつては、鬼ヶ島は言いがかりに近いのだろうか。ラーヴァナの鬼ヶ島は案外人気があるのではないかと思うのだが、それには鬼という存在をどう位置づけるのかという問題もかかわっていきそうである。

観光地となった「鬼ヶ島」

鬼の棲む場所と聞いて思い浮かぶのは、どんなところだろうか。日本には、鬼の棲みかとされる土地の伝説がじつにたくさん残っている。桃太郎伝説に出てくる鬼ヶ島のモデルのひとつとされるのが、香川県の女木島である。女木島の中央にある鷲ヶ峰山頂には、広さが四〇〇〇平方メートルもある大洞窟があり、鬼が棲んでいたと言ひ伝えられている。なんでも、大正三(一九一四)年に発見されたのだが、それ以前の記録は残されていないのだという。誰が作ったのかわからないが、今ではすっかり「鬼ヶ島大洞窟」として定着し、島の観光資源として大いに人気をよんでいる。

インド世界の「鬼ヶ島」

さて、海外に鬼ヶ島に相当する場所はあるのかと考えると、まささきに思い浮かぶのは



女木島の大洞窟入口(2019年)

鬼の棲む島——「鬼ヶ島」の古今東西

松尾 瑞穂

民博 超域フィールド科学研究部

弓には別の使い方として、弦を弾いて音を出し、妖魔を驚かせて退散させるというものもある。こちらは招き入れるというよりは、厄払いが目的である。京都の松尾大社の節分祭にて追儺の行事に続いておこなわれる「鳴

弦破魔弓神事」などがそれにあたる。拜殿で宮司が弓を構え、弦を三度鳴らし「松尾の神に祈らむ梓弓、弦の音きけば悪魔退く」と和歌を唱えて鬼の退散を念ずる。この梓弓が楽器として見なされるか否かという点でいえば、

むしろ道具、または神具であるという方が正しいであろう。だが、何かしら魂を揺さぶる音というものには、心地良さとともにずっと聴いていたいという、人を惹きつける魔力が、備わっているのかもしれない。

ソグド人の城を掘る

むらかみ ともみ
村上 智見

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員



お宝を掘り出してみました

焼け焦げた壁を観察している筆者
(撮影：Alisher Begmatov, 2017年)

中央アジアのカフィル・カラ遺跡。本館の研究者も参加しているその発掘調査で、近年相次いでお宝が発見された。記念すべき発掘の瞬間はどのようなものだったのか？ 調査団の一員である筆者に綴ってもらった。

学生のころ、図書館で何気なく手にとった本。そこには奈良時代に大陸から舶載され、正倉院に納められた「花託」とよばれる美しいフェルトカーペットが紹介されていた。遊牧民の素朴な日用品であるフェルトに、華やかな異国風のデザインを緻密に施した、何とも洒落でオリエンタルな雰囲気を持つこの宝物に、わたしは一瞬で心を奪われてしまった。それからというもの、大陸から日本にもたらされたモノや文化に興味をもち、ソグド人という人たちがシルクロード交易を支えていたことを知る。彼らのことを知るために、中央アジアでの調査を開始した。

ソグディアナでの発掘調査

ソグド人は現在のウズベキスタンとタジキスタンにまたがるソグディアナ地域を本拠とし、国際商人として東西交易で活躍した人たちだ。ソグド語はシルクロードの共通言語になり、ソグド人の影響力は唐王朝にまでおよんで重要な地位につくものもいた。日本の法隆寺にもソグド語が刻まれた白檀の香木が伝わっている。中国・唐では胡人(ソグド人と考えられている)の歌や踊り、服装、文様などの西域文化が大流行した。しかし、八世紀ごろからイスラーム勢力の襲撃を受けるようになると弱体化し、やがて消滅していった。

ソグディアナでは二〇〇五年から日本隊が遺跡調査を実施しており、わたしも調査に参加して早一〇年となった。二〇二三年度からはソグディアナの中心的都市であったサマルカンド近郊のカフィル・カラ遺跡で発掘調査をおこなっている。これまでの調査で、シタデル(城)は塔と堀をめぐらせた堅牢な造りであり、内部には壁画をもつ

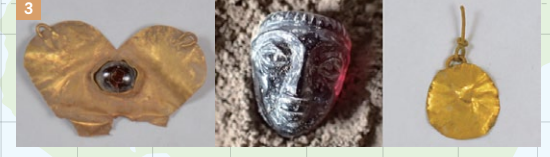
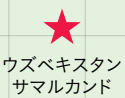


木彫板に彫刻された女神(2017年)

二階建ての建物が存在したことがわかっていて、シタデルは火が放たれ全焼しており、首を落とされた人骨が出土するなど、八世紀初頭に攻撃され陥落した生々しい様子を今に伝えている。

美しい女神と人びと

二〇一七年九月七日、遺跡からは炭化した豆が大量に出土し、わたしは一粒一粒、壊さないよう取り上げるべく孤軍奮闘していた。そこへ突如ウズベキスタン側発掘担当者が大興奮した様子でわたしを呼びに来た。急かされてシタデル最奥の部屋に向かうと、真っ黒に焼け焦げた木製品の一部が、今まさに土から顔をのぞかせたところであった。よく見ると何やら細かい文様が刻まれている。柔らかないプラシで慎重に土を取り除いていくと、人物らしき姿が浮かび上がった。すぐさま考古学研究所から応援が呼ばれ、数日かけて丁寧に発掘を進めた結果、三〇〇×五五センチメートルのアーチ形木彫と、その隣か



1 タ暮れのカフィル・カラ遺跡 (2014年)
2 木彫板を発掘している様子 (2017年)
3 2018年に出土した宝飾品類

続く大発見

翌二〇一八年九月二日、木彫板が出土した部屋の階段状遺構の溝内部分から、今度は宝飾品類が見つかった。初めに顔を出したのは黄金の垂飾(写真3右)。急いでふるいを留意してもらい、溝内の土をすべてふるいにかけての結果、赤石が象嵌されたハート形の金製品(写真3左)、金銀リパーシブルの垂飾、人面を刻んだ赤石(写真3中央)などが相次いで発見された。貴石を象嵌した、ネックレスとみられる豪華な銀製品も出土した。なぜ溝に宝飾品類が埋納されていたのかは今のところ不明だが、王のもち物か、もしくは神像が身に付けていたものなのかもしれない。

これらは他に例のないものであり、謎の多いソグド人の歴史・文化を知るうえで極めて貴重な資料だ。一生に一度、経験できるかどうかというお宝発見に、二年連続で立ち会えたわたしは幸せ者である。カフィル・カラ遺跡はまだその一部を発掘したにすぎず、今後もお宝発見が続く可能性がある。遺跡の役割の解明、出土した資料の研究や保存・修復・活用などまだまだ課題も多いが、今後も皆さんにワクワクするような成果をお届けできれば嬉しく思う。

想像界の生物相

キフェベの仮面

よしだ けんじ
民博 館長 吉田 憲司



資料名	左：キフェベ・ムカシ（雌） 右：キフェベ・ムルメ（雄）
標本番号	左：H0168027 右：H0001662
地域	コンゴ民主共和国
サイズ	左：高さ 44 cm 右：高さ 60 cm

アフリカ大陸の中央部、コンゴ民主共和国（旧ザイル共和国）の中部に住む民族ソングの人びとの社会には、キフェベ（複数形はビフェベ）とよばれる仮面結社が見られる。結社のメンバーは男性に限られている。仮面をかぶった踊り手は、ラフィア椰子の繊維を編んだネットのできた衣装に身を包んで、さまざまな儀礼の場に登場し、踊りを演じる。結社に加われない女性や子どもには、それらの踊り手は、森に住む神秘的な生き物だとされている。

◆◆雌雄のある仮面◆◆

キフェベの仮面は、いずれも額から鼻にかけてトサカのような突起が付き、目や口が突出した立体的な造形を特徴とするが、トサカの大小や彩色の違いによって雄と雌の区別がなされている。

雄の仮面は、大ぶりのトサカと大きく突出した口をもち、全体が赤・白・黒の縞模様で覆われる。この縞模様は、ソングの人びとのあいだで喧嘩好きな動

物とみなされているシマウマやアンテロープ（羚羊）の体の模様由来するといふ。

一方、雌のキフェベの仮面は、トサカの突起が低く、顔の広い部分が白一色に彩色される。

白、赤、黒の三色については、ソングの人びとのあいだで、かなり明瞭なシンボリズムが共有されている。白は清浄な色で精霊と結びつき、赤は血の色で活力を示唆する。そして、黒は秘匿の色であり、呪い（ウィッチクラフト）と結びつくという。

◆◆攻撃と恵み◆◆

キフェベの仮面を着けた踊り手は、ソングの社会で成人式の意味をもつ男性の割礼の儀礼や首長の即位の儀式、葬送の儀礼などに集団で登場してくる。その集団のなかに、雄のキフェベの仮面を着けた踊り手は多く含まれるが、雌のキフェベの仮面の踊り手は常に一体に限られる。

踊りの動きや、振る舞いも、雌雄のあいだで顕著な対照がみとめられる。雄のキフェベの仮面を着けた踊り手は、複数が同時に舞い、闊達な踊りを披露する。男性の割礼の儀礼では、女性や子どもたちを追い払って割礼のキャンプを警備し、また割礼を受ける少年たちを教導する任に当たる。かつては他の集団との戦闘の際に士気を鼓舞する役割もになったという。攻撃的な動物の特徴を組み入れた仮面は、踊り手の荒々しい振る舞いをいやがうえにも高めることになる。

一方、雌のキフェベの仮面をかぶった踊り手は、単独で抑制のきいた規則的な舞踊を演じる。その踊りは、病の治癒や大地の豊饒をもたらししてくれるとされている。

キフェベの雌雄の仮面は、森に満ちた精霊の力の、攻撃的な側面と恵み深い側面を体現している。

風流と浮立

民博 学術資源研究開発センター 笹原 亮二

日本の文化展示
「祭りと芸能」セクション

〈本館展示場〉



かぶりもの(月の輪) (長崎県、H0269567)



平田一式飾 牛若丸と弁慶(島根県、H0269570)



ししがしら(熊本県、H0272532)

観覧券売場

物の目を意識し競い合うことで一層過剰になっていった。室町時代、京都周辺では、装飾を施した傘の周囲で、人びとが趣向を凝らした扮装で囃子を奏して踊り回る風流拍子物がおこなわれた。そして、室町末期にかけて、演者たちがそろいの衣装や被り物やもち物などに統一的な振りで、流行の歌謡にあわせて踊る風流踊が盛んにおこなわれるようになった。こうした風流の系譜をうけて、風流コーナーに見られるような、殊更に人目を引く趣向を凝らす装飾性を眼目とする、風流系統の祭りや芸能が各地に伝来するに至ったといえる。

風流コーナーの笠

風流コーナーで造り物とともにあらたに加わった資料に、踊の演者が被る笠がある。平安末期から演じられるようになった田楽踊は、当時流行した風流の影響で演者の扮装などが華美で装飾的になった。風流化した田楽踊に由来する笠としては、従来から展示されていた山形県大物忌神社の花笠舞の笠などに、福井県福井市の睦月神事の田楽踊の笠があらたに加わった。「ナカトビ」とよばれる子どもの演者が被る笠で、水引で作った松の木を立てて、その周囲に大ぶりの造花を配した華やかなものである。

室町時代に盛行した風流踊に由来するさまざまな笠も展示されている。京都府の久

多の花笠踊や八瀬の赦免地踊の灯笼笠や、兵庫県但馬地方のざんざか踊の花笠などの京都周辺各地の踊の笠、鹿児島県の大浦太鼓踊や市来の七夕踊の花笠、長崎県の福江島のちゃんこや平戸のじゃんがらの花笠などの従来から展示されている資料に、長崎県長崎市の月の輪太鼓の巨大な三日月型の造り物が付いた笠、熊本県の野原八幡宮の大祭の「風流」とよばれる太鼓踊の笠が加わった。この風流の笠は「ししがしら」とよばれ、扇型を二枚重ねて上下の顎に見立て、紙で作った目や耳などを付けて獅子頭を象っている。

京都から九州へ

民博の展示にもあるように、九州には風流系の踊が数多く伝来している。特に九州



上：天衝舞浮立の三日月型の造り物が付いた笠 (佐賀県佐賀市、2011年)
下：野原八幡宮大祭の風流(熊本県荒尾市、2012年)

北西部では、華美な笠や衣装や鬼面を着けたり、さまざまな趣向を凝らした踊が盛んである。それらは「フリユウ」と総称され、「浮立」の文字が当てられる。「浮き立つ」というのはうまい当て字だが、音が風流と同じことから、京都周辺でおこなわれるようになった風流踊が、ある時期なんらかの経緯で九州北西部に伝わったものと思われる。こうした風流と浮立のふたつのフリユウは、これらの風流系の踊が、時代と地域の交錯のなかで形成されてきた歴史的存在であることを示している。

ちなみに、日本の文化展示の仮面の展示コーナーには、九州北西部の獅子浮立の獅子頭が一点展示されている。ほかの獅子頭とは異なるお盆型の形状であるが、ぜひ探してみしてほしい。

民博の日本の文化展示は、祭りや芸能に関するハレの展示と生産活動や住居などの日々の暮らしに関するケの展示から構成されている。ハレの展示のもっともケの展示に近い一角は、平成二五(二〇一三)年の日本の文化展示の改修であらたな資料が加わり、印象を一新したコーナーである。その新しい資料とは、陶磁器のみで予想外の形象を作り出す島根県平田の一式飾をはじめ、祭りや芸能において人目を引く趣向を凝らした装飾性に富む造形物で、祭りや芸能における「風流」の系譜に連なる品々といえる。となると、そこは差し詰め風流コーナーということになるのか。

この場合の風流は「フリユウ」ではなく「フリユウ」と読む。風流は通常きらびやかで雅な美を意味するが、風流はそれとは異なる。風流(以下「風流」は断りのない限り「フリユウ」を指す)は、平安時代には事物に人目を引く装飾を施したり、華美な衣装を身にまったりすることを意味し、さらに、装飾的な事物や衣装そのもの、つまり、精巧で華美な細工などの装飾を施し、一際人目を引くように趣向を凝らした人工的な造形物そのものをそうよぶようになった。その後、鎌倉時代にかけて、祇園会などの祭りの際の神幸に加わる人びとの衣装や造形物や、芸能の演者の扮装などに華美で新奇な趣向を凝らす風流が、人びとが見



社会主義体制と芸術と愛の物語

新免光比呂
 民博 超域フィールド科学研究部

社会主義体制下での芸術統制
 クラシック音楽を演奏するだけで音楽家がオーケストラから追放される。これを理解するには、ストーリー以後の社会主義体制下で芸術的行為にかかわる危険性を知らねばならない。

「オーケストラ」

原題：Le Concert

2009年／フランス／フランス語・ロシア語／119分／DVDあり

監督：ラデュ・ミヘイレヌ

出演：アレクセイ・グスコフ、メラニー・ロランほか

ロシアを代表するバレエ、オペラ劇場(歌劇場)であるボリショイ劇場(1964年、梅棹忠夫写真コレクションデータベース、X0224587)



映画の冒頭、かつてボリショイ交響楽団の天才指揮者として知られていたアンドレイ・フィリポフが楽団を追われ、清掃員として働いている姿が描かれる。追放はユダヤ人排斥に反対したからとされるが、実際には、彼の偏執的情熱から社会主義体制下でブルジョアの退廃とみなされていたチャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲二長調」(以下、「ヴァイオリン協奏曲」)を指揮したためだった。

オーケストラからの追放後、アンドレイは挫折感からアルコールに溺れてしまう。だが、指揮への想いはやみがたく、ある日、パリの劇場がオーケストラを探していることを知ると、追放されていたかつての楽団員たちを集め、ボリショイ交響楽団になりすましてパリへ向かう。そして、彼とともにオーケストラを追放され、それを西側のメディアに伝えたために夫婦ともどもシベリア収容所送りとなり、獄中で死亡した女性ヴァイオリニストの娘と運命の共演を果たす。

映画はフィクションであるが、社会主義体制を知る者には、独裁政治や非人間的官僚主義の恐怖、生活物資の欠乏、人びとの諦観と無気力を思い起こしながらも、なんらかの文化が確実に存在したという点で限りないノスタルジーを誘う作品となっている。



東欧の人びとの憧れの地パリ、その空の下、セーヌが流れる(2006年)

ロシアで政府が芸術を統制したのは、ロシア帝国が始まりだった。レーニンに指導されたソ連邦が誕生すると、貴族階級やブルジョワ、ブルジョワの芸術家らが追放され、若き芸術家たちは保守的な美術を退け、前衛的かつ社会革命のための

やがて一九六四年のブレジネフ体制の成立によって、ふたたびソ連は保守的モラルに基づいた社会的停滞期に入る。

チャイコフスキーと許されざる愛

の芸術を試みた。それは、「ロシア・アヴァンギャルド」とよばれ、美術・音楽・文学・デザイン・建築などあらゆる分野で画期的な作品を発表することで革命的、政治的芸術を表現した。だが、労働者階級や大衆の一部、政治指導者には難解とされしだいに保守化し、ある意味でブルジョワ的ともいえるモラルへ傾斜した体制下で、継続は不可能となった。独裁者となったスターリンは社会主義リアリズムを重んじ、芸術家たちは政治権力というばかりでなく、スターリン個人の意向をうかがいながら創作と生存の道を探るようになった。一九五六年のフルシチョフによるスターリン批判以後、政治的には雪解けを迎えたが、

主人公がオーケストラから追放される原因となったチャイコフスキーの音楽は、叙情的で流麗メランコリックな旋律や絢爛豪華なオーケストレーションなどで知られ、とりわけ後期の交響曲、バレエ音楽、協奏曲などが世界中で愛好される。だが、ロシア帝国のアレクサンドル三世の治世下で愛されたこと、生前から同性愛者のうわさがあつたということが、社会主義体制下では許されなかった。このうわさの根拠は、「ヴァイオリン協奏曲」が作曲された一八七八年ごろのエピソードである。結婚生活の破綻から鬱となったチャイコフスキーが静養に出かけたジュネーヴ湖畔に、ヴァイオリニストのヨシフ・コテックを訪れた。コテックは、サラサーテ初演で大成功を収めたラロ「スペイン交響曲二短調作品二一」の譜面を携えていた。早速、チャイコフスキーは「スペイン交響曲」の研究に取り掛かり、「ヴァイオリン協奏曲」の構想を始め、コテック滞在中の一カ月ほどで書き上げてしまったという。チャイコフスキーがわずかなあいだに精神的に回復し、協奏曲を書き上げることができたのは、当時からすでにうわさとなっていたコテックとの特別な愛情のせいだと考えられてきた。映画のクライマックスで劇場支配人と部下が男性同士でキスをするシーンがある。それは、この協奏曲にまつわる逸話を暗示させている。

ことばの迷い道

義理の親？

な ら ま さ し
奈良 雅史

民博 超域フィールド科学研究所

「調査のとき、どこに泊まっているの？」と聞かれることがときどきある。わたしは答えに窮してしまふ。わかりやすい日本語にすると、「義理の親」のところに泊まっている」と言わざるをえないためだ。

わたしはこれまで中国の雲南省という地域で現地調査をおこなってきた。そのなかで文献調査のために雲南省図書館に通っていた時期があった。そのとき知り合ったのが、そこで働いていた、後の「義理の母」である。毎日顔を合わせているうちに、話をするようになり、後の「義理の父」を交えて食事をするようになった。そんな関係が二、三年続いたあるとき、「義理の母」が「なんかこうしていると思子みたいね」と言い出し、それに対してわたしが「そうだね、お母さん」と応じると、彼女は「じゃあ、今日から『義理の息子』だね」と言った。

それからわたしたちの関係は大きく変わった。お互いのよび名に父や母といった親族名称が用いられるようになった。調査での宿泊先が安宿から彼らの家になった。合鍵を渡され、彼らが不在でも勝手に泊まっている。春節（中華圏における旧暦の正月）などの親族の集まりにもよばれるようになった。「日本人なんかを『義理の息子』にして大丈夫か」といった声もあったそうだが、結局、皆それほどわたしのことを特別視せず、皆で一緒に食事をして年末のテレビ番組を見ている。また、日本から調査地にもっていく荷物の半分以上が彼らに頼まれた品物になった。わたしが「帰省」するとになると、「義理の親」は友人たちからさまざま日本製品をリクエストされるとのことだ。特に医薬

品のリクエストが多く、おかげで薬に詳しくなった。日本語では血縁関係にない親族関係を言いあらわす際、「義理の」という形容詞をつけることが一般的だ。但し、「血縁関係にはないが、姻戚関係にある」という意味で使われることが多い。一方、中国には「血縁関係にも姻戚関係にもない」親族関係を意味する「乾親」とよばれる関係があり、中国全土で広く見られる。わたしの「義理の親」との関係もこれに含まれる。中国語の「乾」は日本語と同じ「乾いた」という意味だけでなく、「形式的な」「中身の無い」といった意味でも使用される。そのため、血縁・姻戚関係にない親族関係にも使われるようになったと考えられる。乾親関係は親族名称に「乾」をつけてあらわされる。例えば、わたしは乾親関係上の母を「乾媽（媽は母の意）」、「父を「乾爹（爹は父の意）」とよび、彼らはわたしを「乾兒子（兒子は息子の意）」とよぶ。

乾親関係が結ばれる目的はさまざまだが、実子に何らかの不幸や病気が続くような場合に、友人などに乾親関係を結んでもらい、運氣を変えることで災難を避けるというものが代表的である。そこには「義理の子ども」を介して両家の関係を深める意味もある。但し、わたしの例のように気の合う者同士が乾親関係を結ぶ場合もあり、近年はそれが汚職などの温床になっていると批判されることもある。

このところ乾媽は腰痛に悩んでいるそうで、何か良い薬はないかと相談されている。まったく見当がつかないのだが、次の調査までに用意しなくてはならないだろう。どうやらまた薬に詳しくなりそう。

編集後記

本誌の巻頭エッセイは1977年からコーナー名を変えつつ続いてきたが、漫画が登場するのは今号で3回目になるようだ。博物館の収蔵庫の人知れぬ夜やものが蠢くパワーが10コマに描かれ、文章以上に想像を掻き立ててくれる。それは、特集でとりあげた特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」が光を当てる、想像界への導入そのものだ。博物館の起源は、西欧の王侯貴族が世界の珍品を集めて愛でた陳列室「驚異の部屋」にある。見たことがないものへの好奇心と見えないものへの畏れは、人間を衝き動かし、ときには律してきた源泉だった。近代化や科学主義とともに、そうした物語が語られなくなって久しいといわれる。だが、「妖怪ウォッチ」や「ポケモンGO」の流行、消えては生まれる都市伝説は、想像界の底力を物語る。現実世界と想像界は、じつは互いの存在なくしては成り立たないコインの裏表なのではないか。だとすると、特別展はこの世のキワどころか、世界の成り立ちのもう半分を思い起こさせてくれるものになる。 (南真木人)

みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もごさいます。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



●表紙：山の神の供え物（オコゼ）
(H0020696、撮影：山中由里子)

次号の予告

特集

「奴隷展示を考える」(仮)

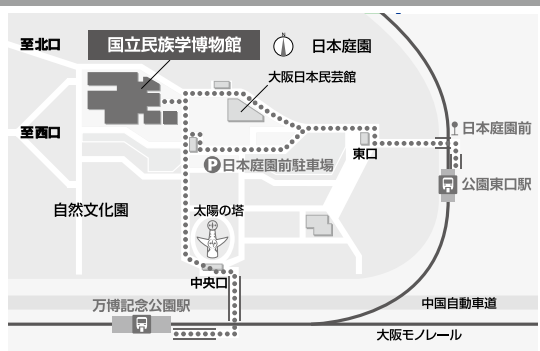
月刊みんぱく 2019年8月号

第43巻第8号通巻第503号 2019年8月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 南真木人(編集長) 上羽陽子 齋藤晃
菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾
デザイン 宮谷一欵 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 遊文舎

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料) から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通ください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>



2020年 国立民族学博物館オリジナルカレンダー

驚異と怪異

— 想像界の生きものたち

監修：山中由里子

25cm × 25cm オールカラー 28頁 中綴じ

価格 1,200円+税

国立民族学博物館友の会 会員価格 1,080円+税

※都合により変更になる場合がありますので予めご了承ください

〈お問い合わせ〉 国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

email : shop@senri-f.or.jp

8月下旬
発売予定

